

こらっせ便り

2023年7月14日



【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008、 eメール : info@korasse-kanagawa.org

Web サイト : <http://korasse-kanagawa.org/>

今年神奈川でリフレッシュプログラム

福島子ども・こらっせ神奈川事務局長 遠野はるひ

8月7日(月)から9日(水)まで、山北・横浜でリフレッシュプログラムを行います! 神奈川に来てくれるのは、昨年、裏磐梯の檜原湖で日帰りのプログラムに参加してくれた福島市の子ども施設の子どもたち。プログラムをとっても楽しんでくれた子どもたちを、ぜひ神奈川に来てもらいたいとお誘いし実現することになりました。

リフレッシュプログラムを神奈川で実施するのは19年以来4年ぶりです。6月22日には福島の子どもの施設をお訪ねするなど準備が進行中です。7月3日には山北町を訪問し、湯川町長、石田教育長、宿泊する箒沢荘の女将とお会いし、貴重なアドバイスをいただくとともに、プログラムをサポートして下さることになりました。

驚いたのは、コロナ禍の間に山北町がキャンプ場として人気スポットとなっていたことです。コロナ禍中はリフレッシュプログラムこそできませんでしたが、山北プロジェクトの一環としてこらっせユースと一緒に何回も山北訪問をしていたので人気があることは聞いていましたが、今回、たくさんの方が山北の川や山に来ていることをあらためて実感しました。いつも遊んでいた川は人があふれ、急遽、新たな場所を探すことになりました。

プログラムの見直しも迫られました。まだ、内容は確定していませんが、従来のプログラム(川遊び・BBQ、花火大会・横浜散策)をベースに組み立てています。今年は事務局スタッフに若いメンバーが増え、これまでシニアが担っていた役割を担っています。一棟借りする箒沢荘は大正時代に建てられた古民家で、昨年末みんなで1泊しましたが、てきぱきした女将が作るお食事はとても美味しかったです。隣接してグランピングができるゲルがあります。ここもお借りしたので子どもたちの喜ぶ様子が今から目に浮かび、ワクワクしています。

3月末に発行したこらっせ便りで賛同のお願いをしましたが、多数の方が賛同人になってくださいました。深く感謝いたします。しかしながら、コロナ禍前と比べ数が少なく、こらっせの活動を将来的に維持するには、さらなる賛同が必要です。

みなさま、引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

3月28-29日 福島スタディツアー 被災地の想いと希望を実感

3月28、29の両日、3.11 東日本大震災・原発事故の記憶をとどめるためシニア3人とユース7人で福島県内各地を訪問しました。

福島市内から川俣町、飯舘村へ

2日目、車で福島市内を回りました。福島駅周辺、県庁、渡利地区の渡利小学校から川俣町を訪れました。同町は朝ドラ「エール」の舞台になったところです。

その後、飯舘村を訪れました。人気が多く、復興事業に従事しているトラックが多くみられました。住民が戻ってきていないのだなと感じました。また空き地が広がっているところが多く、太陽光発電が設置されているところもありました。福島県で発電された電力は、主に首都圏に向けて供給されていることを、その後に訪れた原子力災害伝承館で知り、有難く感じました。(近藤俊輔)

震災遺構・浪江町立請戸小学校

震災遺構である浪江町立請戸小学校に訪れました。請戸小学校は大きな被害を受けましたが、全員無事避難できた奇跡の学校です。校舎の1階は震災による被害を当時のまま残してあり、2階は地域の方々の体験映像や卒業生などからのメッセージが書かれた黒板がありました。

薄暗い体育館には「卒業証書授与式」と書かれた垂れ幕がかかっていました。震災直前は卒業式の準備が行われていたそうです。小学校の卒業式は人生に一度しかないことです。児童の気持ちを考えるととても悲しい気持ちになりました。(神崎文花)



防災林と津波被害の住宅・神社

請戸小学校を後にした私達は、太平洋を望む海岸線へ向かいました。防潮堤の手前側には、数年前に植林された松の若木が並んでいました。防災林は全て大きな波にさらわれ、沢山の家や人々とともに押し流されてしまいました。植えられた若木はまだまだ小さく、以前のような防災林になるまでにはかなりの年月を必要とします。一朝一夕では復興は実現しないという現実を改めて感じさせられました。

海岸線を離れた後は、津波の被害に遭った住宅と八幡神社を見学しました。由緒ある神社ではお祭りが行われるなど、地元の人々から慕われてきました。しかし、大津波で社殿は本殿の台座を残して全壊、大震災から10年を機に福島県神社庁によって再建され、現在は新しく綺麗な社が建て

られています。再建された神社は見た目では真新しいものでしたが、土地に根付いた信仰や歴史、人々の思い出は変わらずにあり続けているのだと思います。しっかりと社を守り続けている狛犬がとても可愛かったです。(井手美由希)

被災地の思い伝わる「伝承館」

常磐線双葉駅から2km程の場所に「東日本大震災・原子力災害伝承館」があります。辺りは一画更地。時の流れが止まったようです。この伝承館は、東日本大震災から着実に復興する過程を収集・保存・研究し、世界に継承・発信していくことを理念としています。

原発事故に伴う原子力災害により、今でも数万人がふるさとを離れた生活を余儀なくされていますが、被災者の経験した複合災害がいかに過酷であるかを物語り、福島で何が起き、どう向き合ってきたかを伝える思いがここにはあります。「原発は、幼いころからあったごく当たり前の施設」と語り部さんは語っていました。原発の構内でドングリ拾いや隠し絵を見つけるイベントなども開催されたそうです。

まだ人が住むには至っていません。日本各地に避難された方々がそれぞれの場所で活躍しており、町のことを思い続けています。「原子力 明るい未来の エネルギー」の看板が外されたこの地域は、「ひとびとは 明るい未来の エネルギー」と主語を変え、前に進んでいます。かつて栄えたように、今度は形を変え、主語を変えながら再び発展していく、その希望を明確に実感させられた伝承館であったと思いました。(下平啓介)

富岡町夜ノ森地区の満開の桜

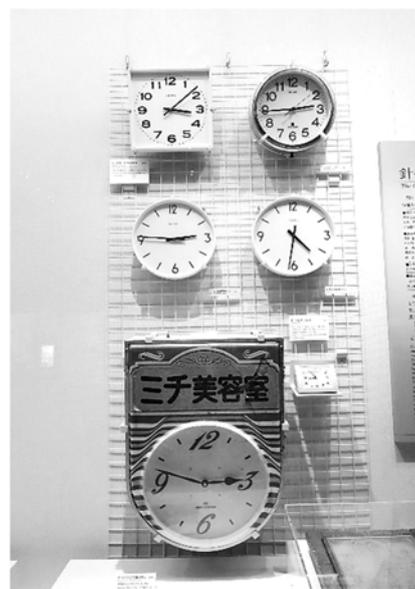
「伝承館」の後、双葉町に向かいました。大熊町と双葉町は福島第一原発がある場所です。車から双葉厚生病院が見えました。住民から親しまれていた病院だったようです。放射性物質が降り注ぐ中、双葉厚生病院での避難活動は難航し全員が避難するまで2日かかり、避難完了までに4人が亡くなりました。

その後、富岡町の夜ノ森地区に行きました。福島県で2日前に満開宣言があり、見頃を迎えていました。桜のトンネルの中を車で通る際には満開の桜と花びらが散る様子とても美しかったです。また桜のトンネルの中をくぐりたいです。(小林真子)

止まった時間が異なる時計

2日目の最後にとみおかアーカイブミュージアムの見学に行きました。ここは、富岡町の成り立ちや東日本大震災と原発災害について学ぶことができます。停電や津波の被害で止まってしまった時計があり、それまで町の人々が送っていた普通の生活が一瞬にして奪われてしまったことが分かります。展示してある時計は、美容室の時計や目覚まし時計など普通の時計です。止まった時間が違うことで震災の影響が広がっていく様子が伝わってきました。

また、パトカーの展示も印象的でした。こちらは地震直後に町民に避難を呼びかけた警察官2人を乗せたパトカーでした。2人とも亡くなっています。誰でも逃げ出したくなる場面での2人の勇気に心を動かされました。(河野みずき)



井戸弁護士を招き「キックオフミーティング」

「311 子ども甲状腺がん裁判」が問いかける重み

本年度「こらっせ」キックオフミーティングが、5月14日に横浜で開かれました。今回のオンライン講演会では、講師に弁護士の井戸謙一さんをお招きして、「子ども甲状腺がんは、原発事故のせいではないの？ 『311 子ども甲状腺がん裁判』が問いかけること」と題してお話をいただきました。また、加藤彰彦さん（沖縄大学名誉教授）にコーディネーターをつとめていただき、井戸さんのお話をもとに活発な議論が交わされました。参加者は計80名で、非常に盛況な会となりました。

井戸さんのお話は、ご自身が弁護団長をされている「311 子ども甲状腺がん裁判」が主題となっています。まず、前提知識として被ばくと甲状腺がんの関係性が丁寧に説明され、それから福島の小児甲状腺がんの多発状況と原発事故が関係ないとする否定論の論拠に一つ一つ説得的に反証が加えられました。福島の被ばく被害は、一般に認識されているよりもはるかに深刻かつ甚大で、様々なデータに基づいてこのことが示されました。「年間100mSvまで安全」論や「年20mSv安全」論のような事故当初から意図的に流布された言説についても、改めてその問題性が明確にされました。

そして、講演の中で最も印象深かったのは、やはりこの裁判に原告として臨んでいる若者たちが置かれた具体的な状況やひとりひとりの様々な思いが、弁護団長の井戸さんの口から伝えられたことでした。

原発「事故」からすでに十数年が経ち、「復興」の圧力もますます高まっています。そして、こうした「弱者」を切り捨てる政治にとって都合の悪い事実は次々となかったことにされようとしています。「事故」直後からメディア報道を通じて、「ただちに健康に被害はありません」という無責任な発言が繰り返されました。そして現在に至るまで、被ばくの被害そのものが人権やいのちを軽視する者たちによって否定され続けています。



「原発安全神話から被ばく安全神話へ」を撃つ

「原発安全神話から被ばく安全神話へ」という井戸さんの指摘は正鵠を射たものです。どのようなプロパガンダによっても否定できない現実があり、まさに「311 子ども甲状腺がん裁判」はこの現実を社会の中で可視化させる画期的な意義があります。裁判に直接携わっている方々だけでなく、社会全体の問題として受けとめていかなければなりません。一人一人が豊かな想像力をもって「当事者」になることが必要とされています。（事務局 清水雅大）